

成人のアタッチメント

— 概観と臨床心理学的考察 —

Adult Attachment

— Review and Consideration from the Standpoint of Clinical Psychology —

林 も も 子

Momoko Hayashi

The concept and research method of “attachment” in developmental psychology was reviewed, and adult attachment was considered from the standpoint of clinical psychology. In developmental psychology, “attachment” has been defined as an affectional bond between the person and his/her parental figure and is said to affect one’s human relationships. Secure attachment is related to adaptation and insecure attachment is related to maladaptation. Whether the parent’s attachment is secure or insecure correlates about 60% with whether a child’s attachment is secure or insecure. Therefore, from a clinical psychological point of view, measuring parents’ attachment is useful for early intervention in child mental health disorder. In developmental psychology, adult attachment has been measured through the accessibility to one’s parental figure’s representation. Clinical experience, however, suggests that not only parental figures, but also partners and close friends may be an adult’s attachment figures because intimacy is an important psychological subject in adulthood. Therefore, it would be necessary to expand the concept of adult attachment and reconsider how to measure it.

I. はじめに

Attachmentは、動物行動学においては、哺乳類の生後まもない個体が、成体の保護・世話を必要とする時期に、保護・世話をしてくれる存在であると判断された成体との間に接近を維持しようとする生得的な行動として観察されたものである (Bowlby, 1969)。発達心理学においては、上記のアタッチメント行動の存在をふまえて、アタッチメントは情緒的絆であり、人間関係に関する内的作業モデルとして生涯を通じて機能すると仮定されている (Bowlby, 1973)。Attachmentは一般的に愛着と訳されているが、日本語の「愛着」に付随する「執着」「未練」などと近似のニュアンスは、概念としての“Attachment”と異なる部分もあると考え、本稿では「アタッチメント」とする。

アタッチメントの行動の指標である「アタッチメント行動」attachment behaviorを「特定の対象への接近・接触を求める行動」、アタッチメントの対象となる特定の人物を「アタッチメント人物」attachment figure、アタッチメント人物へのアタッチメント行動の組織化やアタッチメントに関わる情動制御の様式をその個人の「アタッチメントの型」attachment patternと呼ぶものとする（久保田、1995）。

発達心理学の分野においては、アタッチメントは子どもの発達を促進する親子の相互作用をとらえる概念として、さらに、人間関係やパーソナリティの発達に深く関わる内的作業モデルとして定位され、様々な研究が展開している。精神分析的発達理論の流れにおいては、アタッチメントの概念は人生早期の親子関係が精神発達に大きな影響を与えるという原理論の実証可能性を開いた。臨床心理学の視点からは、アタッチメントは様々な精神障害や不適応行動のリスク・ファクターとして、予防的見地から有用な概念である。すなわち親のアタッチメントの型を測定することにより、親子の関係性の障害を早期に発見し、子どものアタッチメントの型が発達促進的なものとなるような介入が可能になる。また、アタッチメントは、発達および適応の過程における阻害要因となるような対人関係を修正する治療理論の展開という意味でも示唆に富む概念である。

本論考の目的は、心理学におけるアタッチメント概念と研究方法を概観した上で、新たな治療的介入の開発の基盤となる成人のアタッチメントを測定する方法について、限界と今後の課題について考察することである。

Ⅱ．精神分析学者Bowlbyのアタッチメント概念

「アタッチメント」の概念を心理学の概念として確立し、親子関係の研究を大きく前進させたのは、John Bowlby（1907～1990）である。Bowlbyは児童精神科医、分析医としてKlein派の精神分析の訓練を受けイギリスの精神分析学会において重要な地位をしめた。しかし、親子を対象とした彼の研究は、その著書が広く読まれて世間に高く評価された一方で、当初、精神分析学会においては、力動的概念を誤解している（Freud, A., 1960）など批判的に評価された。Freud, A.（1960）は、“幼児の母親へのアタッチメントは、一次的な生物学的衝動であり、生存を守るということについては、Bowlbyに同意する”とした上で、“Bowlbyの記述的用語において「アタッチメント行動」の高さとされるものはリビドー理論的用語においては幼児的ナルチシズムの極致であるという逆説が生じている”と述べている。すなわち対象関係論を基盤とするBowlbyのアタッチメント理論はリビドー理論を統合し得ないという限界を持つが、同時に、彼の記述的思考は「Bowlbyの枠組の単純さ、明解さ」（Freud, A. 1960）をもたらし、それがその後の実証研究の発展を支えているともいえる。

Holmes（1993）は、Bowlbyが当初冷ややかな反応しか得られなかったのは、彼が比較行動学の知見を取り入れて、対象関係の生物学的基盤を見出そうとしたが、この実証主義的な姿勢

はそれまでの精神分析学のメタ心理学のパラダイム転換であったからであるとしている。Bowlby（1969）は、「Freudと彼に続くほとんどすべての分析学者たちは、最終的な所産から過去にさかのぼって回顧的に探求してきた」「（自分のアプローチは）それと逆のものである。基本データとしては、幼い子ども達が、限定された状況において、いかに振る舞うかということについて観察し、パーソナリティ機能の初期の段階を記述し、そこから前向きに外挿法を進めていこうとするのである」（p.4）と述べている。

（１）生得的システムとしてのアタッチメント行動

精神分析学の祖であるFreud,S.（1940）は、「愛は、栄養欲求の満足に倚りながら発現してくる」としている。Bowlby（1960）は、従来の精神分析理論が快感原則を一次的、アタッチメントを二次的動因としてとらえたとして、アタッチメント行動が生理的満足への欲求とは独立の一次的動因であり、快感原則が2次的であるとした。Freud,A.（1960）は既述のようにアタッチメント行動が一次的である点に関してはこの見解に同意しているが、同時に、Bowlbyがアタッチメントという生物学的動因と、心理学的概念である快感原則という次元の異なる概念を並べて後者を二次的としたことを批判している。その後、Bowlby（1969）は、Lorenz（1935）、Tinbergen（1951）、Harlow（1962）他の、比較行動学の実験の結果を踏まえ、Predator、捕食者からの保護を主な機能とする生得的システムとしてアタッチメント行動を規定した。

次に、Bowlby（1969）は、「依存」と「アタッチメント」を次のように区別している。“ある個人が生存のために他者に頼る「依存」は誕生時に最高の状態で、その後の成熟期にいたるまでに徐々に減少するのに対し、愛着は、誕生時にまったく欠如しており、その後約6ヶ月間もそれほど顕著にはあらわれない。”“人と人との関係において、依存と呼ばれることは軽蔑を意味する。…家族の場合には、互いに愛着をもっているということが望ましいことだとみなされる。そして人間関係において、他人と遊離していることは、どちらかという望ましくないことだと考えられている。このように、人間関係における依存性は忌避されるべき条件であり、愛着性は多くの場合望ましい条件である。”（p.274）

さらに、Bowlby（1973）は、アタッチメント行動の促進される時期について以下のように述べている。“愛着行動が最も容易に促進される時期、すなわち生後6ヶ月頃からおよそ5歳までの時期は、愛着人物の有効性についての期待が発達する点で、同様に最も敏感な時期である。しかしそれにもかかわらず、このような感受性は5歳の誕生日以後も10年間は持続する。ただし、子ども時代が過ぎ去るにしたがって、それは着実に減少していく。”（p.224）

（２）内的作業モデル

Bowlby（1973）は、アタッチメント行動の研究からさらに、アタッチメント人物との関係が内在化された表象である「内的作業モデル」と呼ばれる概念を提唱した。内的作業モデルに

ついてBowlbyは以下のように述べている。

“各個人は世界についておよびその中の自分自身について作業モデルを構築し、その作業モデルに助けられて出来事を知覚し、未来を予測し、自分の計画を作成すると仮定する…世界の作業モデルにおいて重要な点は、その人の愛着人物たちがだれであり、その人物たちがどこにいるか、その人物たちにどのような反応を期待できるか、についてのその人の考えである。同様に、ある人が自己について構築する作業モデルにおいて重要な点は、自分自身が自分の愛着人物たちの目にどのように受容されているか、あるいは受容されていないか、についてのその人の考えである。このような相補的な2つのモデルの構造を基礎として、人は愛着人物たちに助けを求める場合、彼らはどのように接近しやすく、しかも応答してくれるかを予測するのである。…愛着人物たちの有効性に多少とも恐怖をいだいているかどうかこのモデルの構造に依存している。…乳児期頃からその後一生を通して愛着人物が実際に存在するか、存在しないかは、個人が日常生活に潜在的に含まれている脅かしの事態にさらされるかどうかを決定する第一の重要な要因となる。…第二の重要な要因となるのは、愛着人物が実際には存在していないにも関わらず愛着人物が有効であるという確信、つまり、個人がなんらかの理由で望む場合に、愛着人物は接近し得て、応答してくれるということを個人が確信しているか、あるいはその確信がないかということである。…個人の年齢が低ければ低いほど、第一の要因である、実際の存在あるいは不在の及ぼす影響は大きい。…3歳の誕生日を過ぎると、第二の要因である有効性・非有効性の予測が重要性を増すようになり、思春期以後になると今度はこれが最も有力な要因になるとと思われる。” (p. 224-225)

この内的作業モデルという概念は、Bowlbyに始まるものではなく、すでにFreud,S.の中に、子どもが親の目標や価値観などを取り入れてそのイメージを基礎に予測を立てたり世界に働きかけたりするという発想があった。Bowlby (1980) は、当時の認知心理学の記憶理論 (Tulving,1972) に基づき、Freud理論の防衛機制を、情報処理過程における情報の排除、歪曲、置き換え、解離と言った視点で内的作業モデルの適応的または不適応的機能として記述している。遠藤 (1992) の概説によれば、認知心理学における記憶理論、情報処理過程のモデルは、その後も発展しており、それらの知見に基づき、Bowlby以後、アタッチメント・システムの内的作業モデルについても、さまざまな議論が重ねられて再検討されている。

Bowlbyは、この内的作業モデルの形成について、生後6ヶ月から5歳くらいを重視しているが、児童期や青年期を通じて作り上げられ、その後は比較的安定した形で維持される、とした。さらに、人により作業モデルが異なるのは、その時点までに、あるいはその時点においてもなお、アタッチメント人物との経験の種類がかなり反映されているためである、とした。

Ⅲ. 子どものアタッチメントの測定

（1）AinsworthのStrange Situation Procedure

Bowlbyの、親とのアタッチメント経験の歴史が乳児に表象モデル、すなわち内的作業モデルとして内在化されるという仮説を科学的検証に耐える実験により実証可能にしたのが、Bowlbyの研究仲間であるAinsworth（1978）のStrange Situation Procedure（新奇場面法。以下、「SSP」とする）である。SSPにおいては、1歳前後のまだ言語発達が充分になされる以前であり、一方、歩行などの運動面の発達はある程度できており、自分の意志により接近、回避行動を行なうことができる乳児を対象とする。そして、新奇場面に母子を置き、母親との分離、再会に対する乳児の反応、乳児にとって見知らぬ他者である実験者に対する乳児の反応、また、新奇場面における乳児の探索行動を観察することにより、乳児の中にできあがっている母親とのアタッチメント関係の質を測定する方法である。この方法はその実験方法としての信頼性と妥当性がその後の多くの研究により確認され、アタッチメント研究において広く用いられている。同じ方法を2歳児、3歳児、4歳児に適用した研究も行なわれたが（Maccoby&Feldman, 1972; Marvin, 1972）、3歳児以降は分離事態への混乱の度が低かった。母親を、父親やその他の養育者に置き換えたSSPも数多く行われており、SSPは、一般的にアタッチメント関係を捉える方法として確立している。

Ainsworthは、SSPによって、子どものアタッチメントの質を評定し、その結果を安定型；secure、不安定一回避型：insecure- avoidance、不安定一両価型insecure- ambivalence、の3つの型に分類した。その後、Main&Solomon（1990）により不安定—無秩序型insecure—disorganizedという第四の型が抽出され、現在は4つの型に分類される。各型について簡単に述べる。

B型と呼ばれる、アタッチメントが安定型の乳児は、母親を安全基地として新奇場面でかなり自由に探索活動ができ、見知らぬ人に対しても肯定的な態度が多く、親との分離時にその慰めを受け入れることができる。短時間の母親との分離における苦悩状態においても母親との接触を求め、母親との再会後に容易に落ち着きを取り戻し、ほどなく遊びに没頭する。

A型と呼ばれる、アタッチメントが不安定一回避型の乳児は、母親との分離に際しあまり泣いたり混乱を示したりせず、母親との再会場面で母親を避け、母親からだっこしようとしても子どもの方からだきつくことがなく、母親がだっこするのをやめてもそれに抵抗を示さない。母親と関わりなく探索行動を行なうがB型よりも探索行動は抑制されている。見知らぬ人に対する態度と母親に対する態度にあまり差がみられない。

C型と呼ばれる、アタッチメントが不安定一両価型の乳児は、母親との分離に際して非常に強い不安や混乱を示す。母親との再会時には強く身体接触を求めて接近する一方で親に強い怒りを示すという両価的な行動が見られる。探索活動は乏しく、見知らぬ人に対しては否定的な態度が多い。

D型と呼ばれる、アタッチメントが不安定—無秩序型の乳児は、上記のA～Cのいずれにも分類することが不可能であった一群であり、親との再会場面において、抑鬱や混乱を示すかのように動作が停滞する「凍結」が見られたり、強く接近を求めた直後に激しく回避したり、常同運動を示すなどの非組織的な行動がみられる。探索行動は乏しい。

A型（回避型）の子どもは、自然観察場面において、母親との分離に強い怒りを示し、生理的指標でC型（両価型）と同じように強い不安を感じていることが明らかになった。A型とC型の一見対照的な母親との関係は、アタッチメント行動の表出を抑え込もうとするか、極力表出しようとするかの違いであると考えられる。

このSSPは、子どもの安定したアタッチメント関係の基本的要素を以下の3つであると操作的に定義しているといえよう。

1. 子どもはアタッチメント人物との分離に際して不安を感じる。
2. 子どもは、中程度の不安を喚起される条件に置かれた場合に、アタッチメント人物に接近して不安の鎮静化の働きかけをアタッチメント人物に求める行動をする。
3. 子どもは、アタッチメント人物を安全基地とした探索行動をする。

（2）アタッチメントの型の起源

アタッチメントの型は、乳児の気質の反映ではなく、対象との相互作用の型の反映である。親とのアタッチメントと保育園の保育士とのアタッチメントの型が異なる（Goosens and van I Jzendoorn, 1990；Oppenheim, Sagi, & Lamb, 1998）ことがこれを裏付けている。

また、母子のアタッチメントの型と観察・評定された母親の養育行動との関連を検討したいくつかの研究（Ainsworth, 1978；Main and Weston, 1982；Grossman et al., 1986；Sroufe, 1979）からは、アタッチメントが安定型の乳児の母親は乳児に対して応答的であり、不安定で回避型の乳児の母親は応答性が低く、不安定で両価型の乳児の母親は一貫性のない応答を示すことが示されている。また、Belsky他（1984）は、母親の声かけ、泣きをなだめる身体接触、注意喚起などの刺激の量とアタッチメントの型の関連を検討し、アタッチメントが安定型の子の母親は応答的で適切な関わりに加えて適度な刺激を与えており、これに対して、不安定—回避型の子の母親は子どもとの身体接触を回避し、子どものストレスや困惑の信号を無視する一方で刺激量は過多であり、不安定—両価型の子の母親は子どもとの身体接触はするが、関わりに一貫性が見られず、刺激量は不足きみであることを明らかにした。

すなわち、アタッチメントが安定型となることと関連するのは、アタッチメント人物との関係の量よりも質であり、その質は子どもの信号に対する調和的な同調による相互作用（Brazelton & Cramer, 1991）であり、適切な刺激量であると考えられる。

(3) 子どものアタッチメント表象attachment representationへのアプローチ

AinsworthのSSPはアタッチメント行動の観察からアタッチメントの型を分類した。Pipp(1990)は、SSPによってとらえられた乳児のアタッチメント行動の個人差が、「母子の外的な相互作用スタイルの差」によるのか、「乳児の内在化した表象モデルの差異」によるのか、結論できないと批判している。

そこで、Bretherton, Ridgeway, and Cassidy (1990) は行動ではなく表象レベルのアタッチメントをとらえる試みとして以下のような研究を行なった。37ヶ月の被験児に人形や模型によってアタッチメント行動が喚起される可能性が高い5つの場面を提示し、被験児から、次に何が起きるか話を聞くという物語完成課題を課した。その場面とは例えば「両親が子どもをおばあちゃんに預けて一泊旅行に車ででかけようとする場面」である。この結果から、アタッチメント表象を、安定、回避、両価的、無秩序（前3分類に分類不可能なもの）の4つの型に分類した。そして、18ヶ月のSSPと、25ヶ月の観察のQソートにより測定されたアタッチメントとの対応を検討した。その結果、37ヶ月時のアタッチメント表象の安定／不安定と、37ヶ月時の実際の分離—再会場面における子どものアタッチメント行動の安定／不安定の分類との間に有意な一致がみられた。しかし、下位分類（回避、両価的、無秩序）については、アタッチメント表象とアタッチメント行動の間に有意な連関は見られなかった。この下位分類における結果が、表象と行動の不一致を示すものであるのか、アタッチメントの型が3歳までに可変的であるためなのかは不明である。

次に、Main (1991) は、1歳の時にSSPで分類された10人の11歳児に、過去の経歴を語らせてその表象からアタッチメント型を分類するという研究を行なった。アタッチメントの型の分類において、1歳時と10歳時の分類には75%の一致がみられた。さらに、安定したアタッチメント型の子どもたちは、不安定なアタッチメント型の子ども達に比較して、物語に一貫性があり、就学前の記憶が明瞭で、明確に自己を認識しており、自分の考えについて考える「メタ認知的モニタリング」の能力があった。

これらの研究により、アタッチメントが安定型であるか不安定型であるかの分類は、表象レベルと行動レベルで一貫性を持ってとらえられる可能性が示唆された。

(4) 安定型のアタッチメントと適応

乳児期にSSPによってアタッチメントの型を分類した子どもの追跡研究から、アタッチメントが安定型であることと思春期以前の社会適応との関連性が示唆されている。

Bretherton (1985) は、2歳時にSSPによってアタッチメント分類を行なった子ども達を対象として就学前、入学時、10歳時に追跡研究を行なった。その結果、アタッチメントが安定型の子どもは、アタッチメントが不安定型の子どもに比べて、注意力がより長く持続し、自由遊びにおける積極性が高く、より自信を持って道具を使用し、困難な課題の解決において母親か

らの助けを引き出すことがより上手にできた。また、アタッチメントの分類結果を知らされていない保育園の担任による子どもの評価は、アタッチメントが安定型の子どもについては、共感性があり、素直で積極性がある、というものであり、一方、アタッチメントが不安定—回避型の子どもについては、友達との交流において敵対的で距離を取る、というものであり、また、アタッチメントが不安定—両価型の子どもについては、無気力で教師に依存的で友達との自由遊びにうまく溶け込めない傾向がある、というものだった。

また、Grossman (1991) は、1歳時にSSPによってアタッチメント分類を行なった子ども達を対象として6歳時に追跡研究を行なった。その結果、アタッチメントが安定型の子どもは、アタッチメントが不安定型の子どもに比べ、集中的でより長く遊び、交友関係におけるトラブルをうまく処理し、肯定的な社会的知覚を持っていた。

Holmes (1993) は、post-Bowlbianの研究者たちによるその他の研究も含めて、「安定型および不安定型アタッチメントの持続性」、として表1のようにまとめている。

表1からもわかるように、子どもが1-2歳時におけるアタッチメントが安定型であったことと、その数年後の思春期以前の時点での社会適応性の高さとの間には関連性が認められた。その理由として、以下の仮説が立てられよう。アタッチメントは同一視が生じる基盤となる人間関係の質である。従って安定型のアタッチメントは情動および衝動の制御を行なう自我および超自我の発達を促進し、その結果、年齢相応の社会適応能力が高くなるだろう。逆に、不安定型のアタッチメントは自我および超自我の発達の障害となるため、様々な精神発達上の問題そして適応上の問題を生じる危険性を高めるだろう。

Bowlby (1951) は乳幼児期のマターナル・ディプリベーションをビタミン欠乏症にたとえて、成人後の精神障害との関連を主張した。また、Bowlby(1973,1988)は、「人生早期の二者関係に由来するアタッチメントの不安定性は、抑鬱や分離不安に陥りやすいパーソナリティを発達させる」としている。しかし、Holmes (1993) が批判するように、その関係はそれほど直線的で単純なものではなく、幼児期以降の出来事、社会的環境などの外的要因も精神発達や適応に影響を与える。

そして、Bowlby (1969) は、内的作業モデルを、環境的 (environmental) モデルと有機体的 (organismic) モデルに分け、“ときどきいくつかの大きな変化が環境内または有機体内に起こる。すなわち、それは、結婚するとか、子どもが産まれるとか、仕事で昇進するといったことであったり、または不幸になるとか、近親者が離れていくとか、死ぬとか、手足が切断されるとか、失明するといったことである。それらの場合に、モデルの急激な変化が要請される。臨床的資料はモデルにとって必要な修正が、いつも簡単になされるとは限らないことを示唆している。” (p.97) としている。内的作業モデルの安定性と変化の過程については、精神療法の立場からも重要な視点であり、Holmes (1993) はその関連について臨床的素材を用いて考察しているが仮説を提起している段階である。

Ⅳ. 成人のアタッチメント

（１）アタッチメントの世代間伝達仮説と成人愛着面接（AAI）

Bowlby（1973）は、“子どもは知らず知らず親を同一視し、その結果、親になったときには、自分が子ども時代に経験したものと同じ型の行動を子どもに対して示す傾向があるから、この相互作用の型が多かれ少なかれ、世代から世代へと忠実に伝達される”（p.356）と述べ、アタッチメントの世代間伝達仮説を立てた。さらにBowlbyは次のように述べている。“生後数ヶ月間における母性の人物との関係に始まり、子ども時代から青年期を通じて両親との関係に広がっていく中で、多様に変化する事態において、愛着対象がいかに自分にはたらきかけてくるかという作業モデルを子どもはつくりあげる。全ての経験はこのモデルに基礎を置くから、のちの人生においても、すべての計画がこれにもとづくのである。”（p.404-405）

この内的作業モデルの特質を把握するための体系的な手法として開発されたのが、成人愛着面接（Adult Attachment Interview 以下、AAIとする）（George, Kaplan.& Main, 1985）である。

数井他（2000）がMain他（1998）のマニュアルから抜粋した概略を参考にすると、AAIは、以下のような方法である。

AAIは、分離や喪失を含む過去の愛着経験およびその現在に対する影響などを問う半構造化された面接であり、そこでの語りは逐語的なトランスクリプトとしてまとめられる。そのコーディングの最も重要な特質は、語りに表れる「過去の諸事象」ではなく「現在の心的状態」に焦点を当てるということであり、語りの「内容」よりもその「形式」や「構造」を重く見ることである。AAIにおける愛着対象は「現にその場に居合わせる愛着対象」ではなく、種々の質問を通して潜在的に活性化される「記憶表象としての愛着対象」である。AAIでは、愛着経験を想起することができるか（記憶表象に対する近接可能性）、それら愛着経験（活性化された記憶表象としての愛着対象）に関して整合一貫した語りを構成することができるか（語りの整合一貫性）という二つの次元の程度が符号化・分類にあたって重視される。

AAIにより、成人の内的作業モデルは、会話の公準（質・量・関連性・様式）に依拠して以下の4つの型に分類される。

F型：安定—自律型（Secure-autonomous）正負両面の愛着経験を容易に想起し、語りに高い整合一貫性が認められ、愛着関係の人生に対する重要性を高く認識している。

Ds型：愛着軽視型（Dismissing／Detached）面接者に対して非協力的で過去の記憶を想起しようとしなかったり、愛着対象を過度に理想化する一方でその具体的な根拠をほとんど示さず、愛着の重要性を低く認識している。

E型：とらわれ型（Enmeshed／Preoccupied）語り全般の整合一般性が低く、語った内容にとらわれてしまい、情動を制御できずに、愛着対象への激しい怒りや恐れなどを表出したりする。

U型：未解決型（Unresolved）分離や死別、虐待等に対して選択的にメタ認知が作動せず、

語りに非現実的な内容が入り交じり、整合一貫性が著しく損なわれ、過去の外傷体験にまだ葛藤した感情を抱き、心理的に解決しきれていない。

また、安定—自律型を除く3つの型は不安定型とされる。

理論的にはAAIにおける以上の4つの型とSSPにおける4つの型は、F型；安定—自律型とB型；安定型、Ds型；愛着軽視型とA型；不安定—回避型、E型；とらわれ型とC型；不安定—両価型、U型；未解決型とD型；不安定—無秩序型、という対応があると仮定される。同一人物の乳児期におけるSSPと成人期のAAI分類におけるその対応が確認された追跡研究（Hamilton,1995）も報告されている。しかし、AAIを用いて盛んに行なわれてきたのはアタッチメントの型の世代間伝達、すなわち、親のAAIで測定されたアタッチメントの型と、子どものSSPなどで測定されたアタッチメントの型の対応である。メタ分析によると、親の分類と子どもの分類との間に、6割以上の確率で仮説通りの一致が見られた（van IJzendoorn 1995）。

（2）成人愛着面接（AAI）の限界

AAIは欧米圏においては広く用いられて、成人のアタッチメントの測定方法として信頼性、妥当性が確認されている。しかし、AAIは、研究手法としての手続きの修得やデータの処理にかかる時間とエネルギーがかなり大きく、コミュニティ・サンプルでの研究が困難であるという限界がある。

さらに、AAIは記憶表象としてのアタッチメント人物に対する近接可能性と語りの整合一貫性を評価する尺度であるため、過去の重要なアタッチメント人物である親との間で形成された内的作業モデルを捉えることは可能であっても、現在のアタッチメント人物であるパートナーや親友との間の関係を直接測定していないという問題がある。

Sroufe and Waters (1977) はアタッチメントの内的作業モデルは、ストレスフルな状況や挑戦を要する状況における、個人の情動制御のルールを提供しており、それによって個人の行動の組織化には一貫性と連続性が与えられている、と述べている。そして、この仮説を、Kobak and Sceery (1988) が、大学生を対象としてAAIによる型と友人からの評定によってとらえた情動制御の側面との関連を検討することにより検証している。その結果、AAIにおいて安定型と評定された被験者は、課題解決や社会的文脈における否定的な感情を、建設的な方向へ調整する能力、高い自己制御能力を表わしていた。また、彼らは友人から敵意性や不安のレベルが低いと評価される傾向があった。さらに、AAIにおいて不安定型と評定された被験者に比べて心的苦悩や悲嘆が低く、社会的コンピテンスが高く、家族からのサポートが高かった。すなわち、アタッチメントの内的作業モデルは、アタッチメントに関する情報処理のみならず、自我の柔軟性や敵意性、不安の高低に関わるあらゆる情動制御に深く関与していることが示唆された。これは、親との間で形成された内的作業モデルの特徴と現在の重要なアタッチメント人物との関係の特徴の対応を間接的に示唆しているが、実際の関係を測定したものではない。

（3）成人のアタッチメント研究における今後の課題についての臨床心理学的考察

最後に、臨床心理学者として精神療法を行ってきた立場から、アタッチメント概念とその測定方法の概観を踏まえて、成人のアタッチメント研究における今後の課題について考察する。

アタッチメントは早期の親子関係と子どもの対人関係の関わりから研究が始まり、その焦点を次第に成人に移してきた。そのために、現在、成人のアタッチメントにおいても保護を求めて親という内的表象に接近する精神的機能を中心として概念化されている。成人が親になる時に自分自身の親子関係が意識的、無意識的に想起されてその表象が再活性化されるという視点からは、親子関係の側面も成人のアタッチメントの重要な一側面であることは確かだろうと考えられる。これは、成人における親の内的表象への近接可能性が、その成人の親としての機能と相関していることを示す研究に裏付けられている（Biringen, 1990 ; Crowell & Feldman, 1988; Haft & Slade, 1989）。

しかし、青年期の課題である自我同一性の達成をある程度なしとげた成人は、対人関係において、親対象だけでなく、同輩としての対等な他者との親密性を獲得することが課題となる（Erikson, 1982）。この親密性は成人のアタッチメントの測定において考慮されていないが、果たして、別の軸として考えることが適当であるといえようか。むしろ、成人に関してはアタッチメント概念を広げて親密性を包含したものとして捉えなおすことが妥当であると考えられる。社会心理学者のアタッチメント研究では親密性を包含する研究も行なわれており、結果としてAAIと類似の類型を抽出している（Bartholomew & Horowitz, 1991）。ただし、この研究においては親密性を行動レベルで表面的にとらえている。

先に、乳幼児のアタッチメントの安定性が後の社会適応と相関することについて、アタッチメントは親との同一視の基礎となるために自我や超自我の発達と関係があるだろうという仮説を述べた。そして、成人において自我が自我同一性を獲得して適切な自我境界を作り、性器統裁水準にいたる発達を成し遂げた結果が、対人関係における情緒的な相互依存性、すなわち親密性であると考えられる。

よく適応している成人は、多くの場合、性愛的パートナーシップを伴う親密性と、これを伴わない仕事仲間や友人関係における親密な他者との関係を築いている。逆に自我が未発達であったり、自我機能が障害されたために何らかの精神的な不適応状態を生じてクライアントとして臨床の場に表れる成人は、親密な関係に何らかの障害を持っている。例えば、親密な関係に対する内的な葛藤が強すぎる場合には親密な関係そのものを現実の人間関係の中で全く築くことができなかつたり、親密な関係を形としては持ち得ていても、極めて葛藤的な関係であったりする。その葛藤的な対人関係は、例えば、親密な関係において過度に依存的である、両価的である、支配的である、攻撃的である、受動的である等の対人関係のスタイルから生じている。そしてこれらの対人関係のスタイルは、アタッチメント理論が仮定するところの内的作業モデルを反映したものと、少なくとも強く関連していると考えられる。

BowlbyやAinsworthのアタッチメント理論を、「人間はアタッチメント人物との接近を維持し、内在化され安定したアタッチメント人物の存在が不安や恐怖をもたらす体験から人を保護し、心理的安定と世界への探索への基盤となる」と解釈するならば、成人期のアタッチメント人物は、強い親密性の存在する関係を築いてゆくパートナーであり、親友であると考えるのが自然ではないだろうか。また、成人において「世界への探索」とは、仕事をする事、家庭生活を営むことに該当するだろう。

思春期から青年期にかけて、親はアタッチメント人物として、自我同一性を模索する際の安全基地としての重要性を再び増す一方、同輩関係や恋愛関係の中で登場する人物の有無や質は、その人の社会適応上、重要な影響を持つことが臨床経験から示唆される。これらの親友や、恋人あるいは性的パートナーは、その関係が持続性を持ってゆく時、新たなアタッチメント人物となると考えられる。そのアタッチメント人物の対象選択がどの程度それ以前の親子関係を中心として形成されたアタッチメントの内的作業モデルによって影響されるのかはまだ実証研究によって十分に解明されたとはいえない。

すなわち、成人のアタッチメント概念を、親密性を包含するものとして拡張して再定義すること、そして、アタッチメント人物を親対象だけでなく、パートナーをはじめとする親密な他者を含むものとして、その測定法を確立していくことが今後の、特に臨床心理学的な領域において成人のアタッチメントを研究していくための課題であると考えられる。

引用文献

- Ainsworth, M.D., Blehar, M.C., Waters, E. and Wall, S. 1978 Patterns of Attachment: Assessed in the Strange Situation and at Home. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Bartholomew, K. & Horowitz, K.M. 1991 Attachment Style among Young Adults: A Test of a Four-Category Model. Journal of Personality and Social Psychology, vol.61, No.2, 226-244
- Biringen, Z. 1990 Direct observation of maternal sensitivity and dyadic interactions in the home: Relations to maternal thinking. Developmental Psychology, vol.26, 278-284
- Bowlby, J. 1951 Maternal Care and Mental Health. Geneva: World Health Organization. 「乳幼児の精神衛生」 1967、岩崎学術出版社、東京
- Bowlby, J. 1960 Grief and Mourning in Infancy and Early Childhood. The Psychoanalytic Study of the Child, 15, 9-52
- Bowlby, J. 1969 Attachment and Loss: vol.1. Attachment. London: Hogarth. 「母子関係の理論 I. 愛着行動」 1991、岩崎学術出版社、東京
- Bowlby, J. 1973 Attachment and Loss: vol.2. Separation. London: Hogarth. 「母子関係の理論 II. 分離不安」 1991、岩崎学術出版社、東京
- Bowlby, J. 1980 Attachment and Loss: vol.3. Loss. London: Hogarth. 「母子関係の理論 II. 対象喪失」 1991、岩崎学術出版社、東京
- Bratherton, I. 1985 Attachment theory: Retrospect and prospect. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society and Research in Child Development, 50 (1-2, Serial No.209)

Brathelton, I., Ridgeway, D., & Cassidy, J. 1990 Assessing internal working models of the attachment relationships: An attachment theory completion task for 3-year-olds. In M.T.Greenberg, D.Cicchetti, & E.M.Cummings (Eds.), *Attachment in the Preschool Years* 273-308. Chicago: University of Chicago Press.

Brazelton, T.B., & Cramer, and B.G. 1990 *The earliest relationships: Parents, infants, and the drama of early attachment*. Reading, MA: Addison-Wesley

Crowell, J.A. & Feldman, S.S., 1988 Mother's internal models of relationships and children's behavioral and developmental status in mother-child interaction. *Child Development*, vol. 59, 1273-1285

遠藤利彦 1992 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観—*心理学評論* vol.35, No.2. 201-233

Erikson, E. H. 1982 *The Life Cycle Completed*. W. W. Norton & Company, New York. 「ライフサイクル、その完結」1989、みすず書房、東京

Freud, A. 1960 Discussion of Dr. John Bowlby's Paper. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 15, 53-62

Freud, S. 1940 *An Outline of Psycho analysis*. *The Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. 23. London: Hogarth. 「精神分析学概説」『フロイト著作集 9』1983、人文書院、京都。p.156-209

George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1985 *Adult Attachment Interview* (2nd ed.). Unpublished manuscript, University of California at Berkeley

Goossens, F. A. & van I Jzendoorn, M.H. 1990 Quality of infants' attachment to professional caregivers: Relation to infant-parent attachment and day-care characteristics. *Child Development*, 61, 832-837

Grossman, K. E., Grossmann, K., & Schwan, A. 1986 Capturing the wider view of attachment: A reanalysis of Ainsworth's strange situation. In C. E.Izard & P. B. Read (Eds.), *Measuring Emotions in Infant and Children*. (vol.2) New York: Cambridge University Press

Grossmann, K. E. & Grossmann, K. 1991 Attachment quality as an organizer of emotional and behavioral responses in a longitudinal perspective. In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle* 93-114. New York: Routledge

Haft, L. & Slade, A. 1989 Affect attunement and maternal attachment: A pilot study. *Infant Maternal Health Journal*, vol.10, 157-172

Hamilton, C. E. 1995 Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. Paper presented at the biennial meeting of Society for Research in Child Development, Indianapolis.

Harlow, H.F., & Harlow, M.K. 1962 Social deprivation in monkeys. *American Scientist*. 207 (5), 136

Hazan, C. & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personal and Social Psychology*, 51, 67-76

Holmes, J. 1993 *John Bowlby & Attachment Theory* London: Routledge. 「ボウルビーとアタッチメント理論」1996、岩崎学術出版社、東京

数井みゆき、遠藤利彦、田中亜希子、坂上裕子、菅沼真樹 2000 日本人母子における愛着の世代間伝達. *教育心理学研究* 第48巻 3号、323-332

Kobak, R.R. & Sceery, A. 1988 Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation, and perceptions of self and others. *Child Development*, vol. 59, 135-146

久保田まり 1995 *アタッチメントの研究—内的ワーキング・モデルの形成と発達—*川島書店、東京

Lorenz, K. Z. 1935 *Instinctive Behavior*, P. H. Mussen (Eds.) New York and London: Wiley

Maccoby, E. E., & Feldman, S. S. 1972 Mother-attachment and Stranger-reaction in the Third Year of Life. *Monographs of the Society for Research in Child Development*. 37 (1)

Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) model of attachment. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde & P. Marris (Eds.) *Attachment Across*

the Life Cycle. Tavistock: Routledge

Main, M. & Goldwyn, R. 1998 Adult attachment scoring and classification system. Unpublished manuscript, University of California at Berkley

Main, M. & Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in Preschool Years*. 121-160. Chicago : University of Chicago Press.

Main, M. & Weston, D. 1982 Avoidance of the attachment figure in infancy. In *The Place of Attachment in Human Bihavior*, C. M. Parked and J. Stevenson-Hinde (Eds.) London: Tacistock

Marvin, R. S. 1972 Attachment and Communication Behavior in Two-, Three-, and Four-year-old Children. Doctoral Dissertation submitted to the University of Chicago

Pipp, S. 1990 Sensorimotor and representational internal working models of self, other, and relationship: Mechanism of connection and separation. In D. Cicchetti, & M. Beeghly (Eds.) *The self in transition*. 243-264. Chicago:University of Chicago Press

Oppenheim, D., Sagi, A., & Lamb, M. E. 1988 Infant-adult attachment in the Kibbutz and their relation to socioemotional development 4 years later. *Developmental Psychology*, vol. 24, 427-433

Sroufe, L. A. 1979 Socioemotional development in infancy. In J. Osofsky (Eds.), *Handbook of Infant Development*. New York: Willey.

Sroufe, L.A. and Waters, E. 1977 Attachment as an organizational construct. *Child Development*, vol. 48, 1184-1199

Tinbergen, N. 1951 *The Study of Instinct*. London: Oxford University Press

Tulving, E. 1972 'Episodic and Semantic Memory' in E. Tulving & W. Donaldson (Eds.) *Organization of Memory*. New York: Academic Press

van I Jzendoorn, M. H. 1995 Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, vol. 117, 387-403

表1 安定型および不安定型アタッチメントの持続性 Holmes, J. (1993) より引用

	妊娠中の母親	赤ん坊 0 - 1 歳	乳児 1 歳	2 歳	6 歳	8 歳	10歳
分類	安定型	応答的な母親 - よりよく見つめ、より敏速に、より多く抱く	安定型	必要な時には母親の助けを求める、自信をもって道具を使う	遊びに集中、社会的に弾力的	離別という事態に対処し得る、解決を見出す	一貫性のある思い出、問題を解決したという話し
	不安定 混乱型 注1	一貫性のない母親	不安定 - 反対感情併存型 注4	不器用、低い依存水準	低い抑制能力	多様な反応	一貫性のない話、解決の糸口のない悲しみ
	不安定 疎遠型 注2	非応答的な母親、実用本位な取り扱い	不安定 - 回避型	仲間に対する敵意と疎遠	過剰抑制	手のない、のっぺりとした顔の絵を描く、悲しみを解決し得ない	記憶および自己認識の不足
テスト	AAI 注3	母と子の観察	新奇場面法 (SS) 注5	保育園での観察	直接観察 再度の新奇場面法 (SS)	遊びの課題 図形完成	自己の来歴について語る
文献	Fonagy et al. (1991)	Ainsworth et al. (1978)	Ainsworth et al. (1978)	Bretherton (1985)	Grossman and Grossman (1991)	Main et al. (1985)	Main (1991)

著者注 1 不安定 - 混乱型は、不安定 - とらわれ型を指す。

著者注 2 不安定 - 疎遠型は、不安定 - 愛着軽視型を指す。

著者注 3 AAIについては、IV - 1) 参照。

著者注 4 不安定 - 反対感情併存型は、不安定 - 両価型を指す。

著者注 5 新奇場面法SSは、SSPを指す。